

はしがき

国際政治の常識とされてきた軍事力中心の国家安全保障観が揺らぎ始めた冷戦末期以降「新しい安全保障」という言説が流布するようになった。そこでは、市場経済システムの不安定化、地球環境の悪化と気候変動、過激化するテロリズム、さらに近年では新型コロナウイルスに起因するパンデミックの拡大等、グローバル化する危機の連鎖が安全保障の問題として論じられている。

他方で、新しい安全保障にかかわるトピックの多くが、依然として伝統的な安全保障論の延長線上で議論され、問題の複雑さをアクチュアルに理解する理論的フレームワークとしていまだ不十分な段階にとどまっている。つまり、伝統的安全保障論では安全保障主体としての主権国家と、その最終手段を担保する軍事力の優先順位は基本的には変わっていないのである。非国家主体や経済安全保障の重要性が説かれることはあるとしても、それらは、せいぜい安全保障問題の強調点を調整するためのレトリックにすぎない。

上記の問題状況を同時代的に論じるとすれば以下のようなになるだろう。すなわち、われわれは、軍事安全保障の焦点が米中対立へと移行する状況を横目に、9.11以降、対テロ戦争を押し進めた米軍が20年後にアフガニスタンから撤退し、結局何も残せなかったという「現実」を目撃している。軍事的安全保障は人々に「希望」の灯は残せなかった。本書が提起する批判的安全保障の研究が、安全保障の参照点を暗黙に「国家・軍事」にあらかじめ限定するような態度をとらないのは、その先に「希望」を見出せないからだともいえる。

「安全保障」をめぐる議論を学問上の発展史として捉え返せば、国際政治学の国家中心主義的なアプローチへの対抗軸として平和学が発展してきたことに注目しなければならない。それは日本の文脈にも当てはまる。そこには「安全保障」研究とそれを批判する平和研究という、暗黙の分業体制ともいえる二項対立の構図が成立してきた。しかし、「安全保障」は、何も国家・軍事分野の専売特許のフレームワークではないし、平和学の反対側にある学問分野という

わけでもない。

その意味で本書『批判的安全保障論』は、従来の伝統的な安全保障研究のあり方の抜本的な組み換えを提起する日本で初のテキストと言える。本書の刊行が呼び水となって、安全保障研究の刷新と深化が進むことを切に願いたい。

最後に、本テキストの全体的な特徴について1点だけ指摘しておきたい。安全保障には、恐怖や不安定という感情を引き起こす契機についても、あるいは安全保障の目的と手段についても、あらかじめ決められた前提は存在しない。それゆえ、テキストという体裁をとってはいるが、各章の用語の統一はあえて最小限にとどめた。なぜなら、安全保障とは、本書を含めて、人為的に構築された安全保障言説の意味作用の象徴にすぎないからである。

例えば、Securitization という概念は「安全保障化」と訳すこともできるし、発話行為に力点を置いて「安全保障問題化」と訳すこともできる。また両方の意味を込めてカタカナで「セキュリタイゼーション」とすることもできる。言葉の選択とは安全保障観の反映であり、常に論争的なものにならざるを得ない。この点は、各章の執筆者のニュアンスを尊重した。こうした安全保障論の特質を念頭に置いて、読者が、批判的安全保障の世界へと分け入ってもらえるとしたら、編者として幸いである。

2021年9月末日

南山 淳
前田幸男